



これからの多文化保育

かわむら まきこ
河村 槇子 さん

(NPO 法人多文化共生リソースセンター東海 副代表理事)



河村槇子さんは、名古屋市中村区にある特定非営利活動法人多文化共生リソースセンター東海の副代表理事を務められ、日本人・外国人にかかわらず、誰もが同じ地域に暮らす仲間として地域づくりに参加できる社会をめざして、外国人コミュニティのサポートや多文化共生の意識づくりに取り組んでおられます。講座6では、「これからの多文化保育」と題してご講演をいただきました。

〈ケーススタディより〉

参考：「多文化保育・教育論」

4歳児クラスに、ベトナム出身のAさんが途中入園しました。Aさんは日本語が話せず、母語で保育者やお友だちに話そうとしていました。保育者は、Aさんが遊びを通して日本語を覚えられるように配慮しながら、Aさんに日本語で話すように促しました。

ある日、Aさんがどこかからボールを持ってくると、保育者は「Aさん、これどこから持ってきたの？外？」と園庭を指し、「これはお外。ダメ。ブブー」と両腕で×を示しました。

Q1. このクラスでは、今後どのようなことが起きる可能性があると思いますか？

Q2. Aさんに対して、できるサポートは、どのようなことがあるのでしょうか？

〔参加者の回答〕

- A1
- 言葉のちがいがから、コミュニケーションをとることが難しいため、Aさんとまわりの友だちがぶつかることが増えてくる。
 - 保育者のジェスチャーをまわりの子どもたちが真似をしはじめる。
 - Aさんは、園での生活に馴染めず、しんどい思いをするのではないか。
- A2
- 絵カード等のイラストを使って伝えると、Aさんにとって、わかりやすい。
 - Aさんの母国語のあいさつを掲示する。朝のあいさつのとき等に、Aさんの母国語のあいさつを使用する。
 - 通訳者がいてくれると、Aさんと周りの子どもたちが、お互いの気持ちを知り合うことができる。
 - 家庭訪問等をとおして、お家の方とコミュニケーションをとることが大切である。

【参加者アンケートより】

- マイノリティの子どもがいることは、周りの子が多文化について学ぶチャンスだと思います。これからの保育に活かしていきたいです。
- 複数のケーススタディをとおして、子どもの置かれている状況や、子ども・保護者の思いについて考えることができました。
- 外国籍の保護者にとって、保育施設が、「最初の社会との出会いの場」であることを意識して今後の保育に臨みたいと思います。

